

学力向上を目指した小中一貫教育の研究 ～小、中教員が相互理解を深め、児童生徒の学力の伸びを省察することを通して～

教育実践力高度化コース

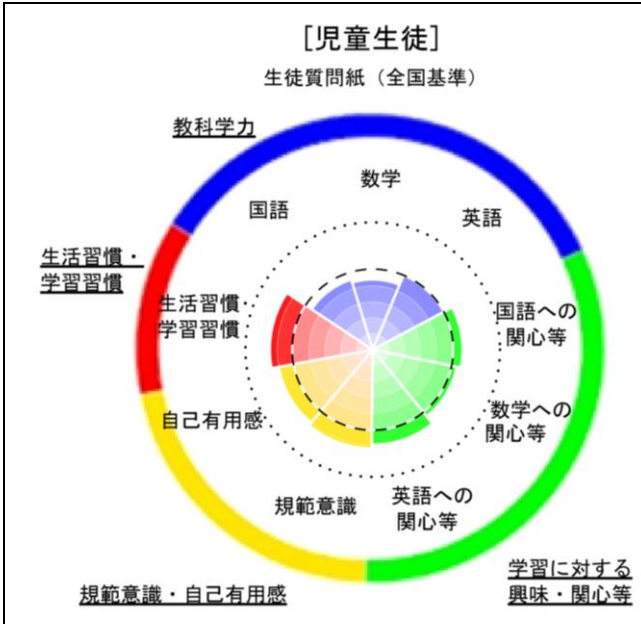
18AD002

石田 真一

【指導教員】 安原 輝彦 安藤 聡彦 庄司 康夫

【キーワード】 小中一貫教育 小中学校の文化 校内研修の充実(合同研修等)

1. 問題の所在(全国学力・学習状況調査から)



平成31年度全国学力・学習状況調査により、本中学校区の小学校の平均正答率は、国語や算数など、県や全国を上回っている教科もある。一方で、本中学校区生徒は、国語、数学、英語の3教科において、正答率が県および全国を下回っている。また、全国学力・学習状況調査結果チャートによると、本校生徒は生活習慣や学習習慣、規範意識、各教科への関心等、全国と比べて高い数値を示しているが、学習習慣や教科への関心の高さが学力面の向上へ影響しているとは言えない状況である。

したがって、本研究では、現状と課題を踏まえ、これまでの小中一貫教育の実践校の研究(成果と課題)や、小中一貫教育に関する理論研究及び、所属校区の小中学校教員のアンケート調査などをもとに、小、中教員が相互理解を深め、児童生徒の発達段階に応じた一貫性のある学習指導を行うことにより学力向上をねらいとして小中一貫教育を推進していくものである。

2. 小中一貫教育実施上の課題

初等中等教育の学校体系に関する研究報告書2『小中一貫教育の成果と課題に関する調査研究第「6章教職員の多忙化と負担感の軽減」(平成27年(2015年)8月)』

文部科学省の実態調査において、小中一貫教育について「大きな課題が感じられる」として指摘された事項の

上位3項目は次のとおりである。打ち合わせや合同研修会などの時間確保に課題があると感じている教職員が多いことがわかる。

- ・小中の教職員間での打合せ時間の確保 (20%)
- ・教職員の負担感・多忙感の解消 (18%)
- ・小中合同の研修時間の確保 (14%)

それでは、小中一貫教育実践校は、多忙化や負担感をどのように軽減しているのだろうか。軽減のための方向性としては、①業務量そのものを減らすものと、②気持ちの問題として捉え負担感を減らすものが考えられる。

①業務の量そのものを減らす

多くの学校で問題となっている会議の回数や長さの問題を解消することがあげられる。例えば、京都市の東山開晴館では毎週木曜日の放課後には部活動等を行わないようにして、集中的に会議を設定していた。東京都三鷹市の各小中一貫教育校や東京都東村山市の村山学園のように、校務支援システムを活用して主に伝達のための会議を中心に削減するような取組もある。また、広島県府中市の府南学園での事例のように、小中一貫教育に関する様々な取組の中で本当にできる取組だけに絞り込んで集中的に行うことで、業務量そのものを減らしている。

教職員の相互理解が不十分だと、小中学校間での教職員交流自体がストレスとなり負担感につながりうる。あえて行事の準備や研究等を小中学校の教職員が一緒にやる機会を設けて、小中間の壁を乗り越えるまで我慢強く続けることも大切である。時間がかかってしまうものの、壁を乗り越えると取組の目的意識も明確化して、負担感の解消につながることも期待できる。

②気持ちの問題として捉えて負担感を減らす

文化的に異なる小中学校の教職員の相互理解や小中一貫教育の意義や成果に関する教職員間での共有。

不登校児童生徒が減り、全国学力・学習状況調査から算数・数学面での効果が出るなど、子どもたちが良い方向に変わる姿を見て取組の有用性を感じさせるようにしている広島県府中市の府中学園の事例や、小中一貫教育の目的化を先述のようなできる取組に絞り込んで解消した同市の府南学園の事例などがあげられる。

3, 先行実践校の研究から

【盛岡西峰学園(盛岡市立土淵小学校・土淵中学校)】

盛岡西峰学園では、「9年間の学習を通して学力が連続的に生まれる」という考えを基本とし、授業づくりの3つの視点(課題の工夫, 考えを広げ深める手立ての工夫, 振り返る活動の工夫)を共有し、全教科で授業改善に取り組んでいる。

成果は、小中教員が目指す授業像を共有したことで、平成29年度全国学力・学習状況調査では、小6国語A・B, 算数A・B, 中3国語A・B, 数学A・B, 全ての項目において正答率が全国平均を10ポイント以上上回った。

【呉市立川尻小学校・中学校】

川尻小・中学校は、「9年間で子どもを育てる」意識を職員間で共有し、授業改善を核とした小中一貫教育を進めた。「教えて考えさせる」授業づくりを基盤とし、異学年交流活動による自尊感情の向上に向けて、兄弟姉妹学級を設定し、異学年交流活動を行った。

成果として、全国学力・学習状況調査において、6年生時と比べて9年生では、全国平均との差が開いた。また、「自分にはよいところがある」を肯定的に回答した割合も、全国平均より20%上回っている。

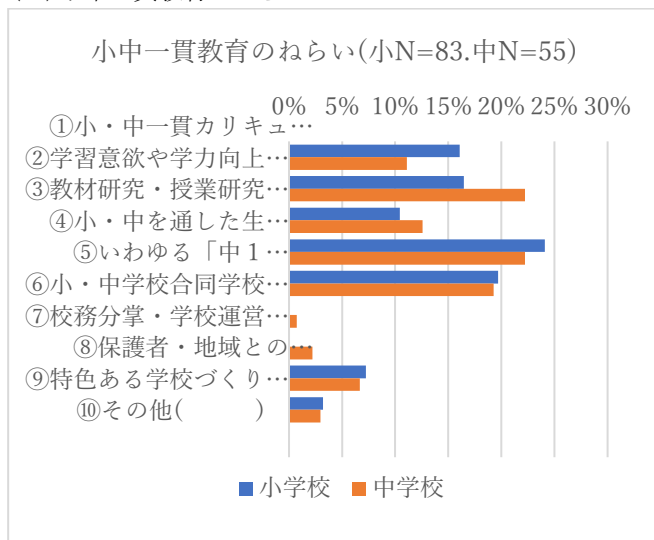
【小中一貫教育推進アドバイザー 森田雅彦氏】

小中一貫教育の導入,そして、更なる進化のために、まずは、小学校と中学校の文化は違うということを相互理解しなければならない。そのためにも職員が交流を深め、児童生徒の学校生活や授業などを参観する必要がある。授業においても9年間の系統的なカリキュラムに基づいた授業を行い、約束事の統一や、人が変わっても変わらない指導を目指す必要がある。

4, 小中一貫教育に関するアンケート調査から

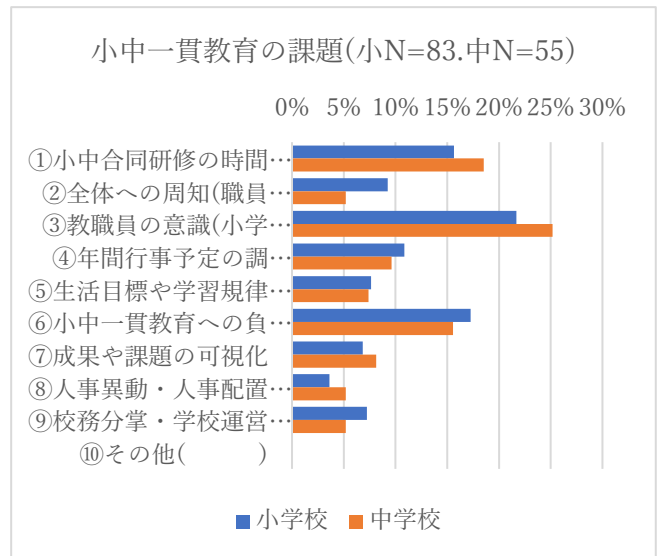
小中一貫教育を推進している3地区(小鹿野町, 皆野町, 所属中学校区)の教員に対してアンケートを実施した。重要となる項目を1人3つまで選び回答している。

(1)小中一貫教育のねらいについて



小中一貫教育のねらいについて、小中ともに④「小中を通じた生活・生徒指導の充実」が挙げられた。⑤「いわゆる「中1ギャップの緩和」も高い数値を示しており、小中の指導体制の整備をねらいとして取り組んでいる教員が多いことが分かった。

(2)小中一貫教育を推進する上での課題について



小中一貫教育を推進する上での課題については、グラフの通り、小・中学校ともに③「教職員の意識(小学校文化, 中学校文化の共有)」が挙げられた。学校種ごとの文化の違いを互いに理解し、共有するためには何が必要なのかを考える必要がある。①「小中合同研修の時間確保」や、⑥「小中一貫教育への負担感・多忙感」の数値も高く、大きな課題である。

(3)理想の児童像・理想の入学生像

①小学校教員(N=83 自由記述)

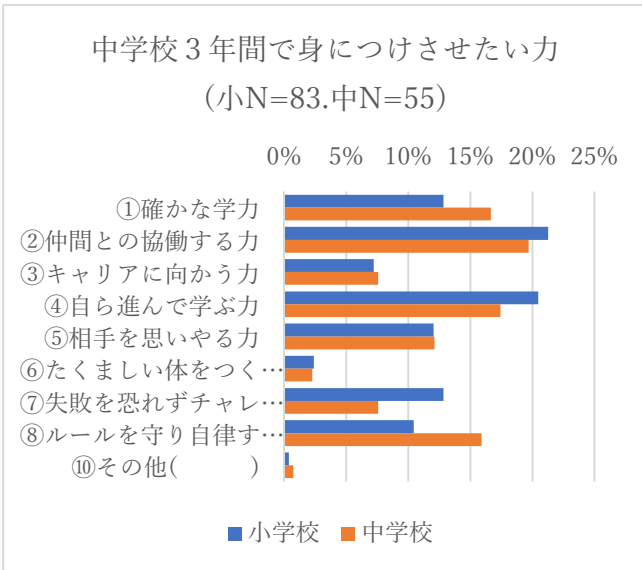
身につけさせたい力	人
確かな学力	45
基本的な生活習慣	20
豊かな心・感性	11
自分も他人も大切にすること	9
自ら考え行動する力	8

②中学校教員(N=55 自由記述)

身につけさせたい力	人
基本的な生活習慣	27
基礎的・基本的な知識技能の習得	23
挨拶や返事	7
意欲・やる気	5
基本的な礼節(態度・言葉遣いなど)	5

小・中学校ともに「確かな学力」「基礎的・基本的な知識技能の習得」に高い意識を持って日々取り組んでいる様子が伺える。ただ、その他の項目では、小学校教員は「心」や「感性」を大切にしているのに対し、中学校教員は挨拶や返事などの「基本的な礼節」を意識していることが分かる。

(4) 中学校3年間で身につけて欲しい(させたい)力



小学校教員には「身につけて欲しい」、中学校教員には「身につけさせたい」という問いでアンケートを実施した。②「仲間と協働する力」、④「自ら進んで学ぶ力」については小・中ともに身につけさせたいと考えている。

(5) 子どもたちの指導で大切にしてほしいこと

小中一貫教育を取り組むにあたり、小中学校相互に子どもたちへの指導で大切にしてもらいたいことを伺った。

① 小学校教員 (N=83 自由記述)

小学校の教員が中学校の教員に対して	人
個に応じた学習指導・生徒指導	16
子どもたちの心に寄り添う指導	5
発達段階に応じた指導	4
小学校時の生徒指導を理解した指導	4
子どもの話をよく聞く(理解する)	4

② 中学校教員 (N=55 自由記述)

中学校の教員が小学校の教員に対して	人
礼儀(挨拶・言葉遣い)	8
相手を思いやる、尊重する心を育む指導	5
授業規律の徹底	5
基礎学力	4
基本的生活習慣	3

子どもたちへの指導で大切にしてもらいたいことは、小学校教員は「個に応じた指導や発達段階に応じた指導」、中学校は「礼儀や規律」となった。校種ごと発達の段階を異にするので学習指導に関する記述が少なく、生徒指導に関する記述が多い。このことを、授業づくり、学力向上の点から考えた場合、更なる調査が必要となる。

(6) 教員インタビュー調査(抽出)した結果から

この調査は、抽出した教員(小3名中2名)からの聞き取り調査であり、サンプルとしては少数であるが、20代から50代までのそれぞれの年齢層の教員を代表する5名と考える。

○『県内のアンケート調査結果から、小中一貫教育の成果として「②学習意欲や学力向上の推進(学力調査のデータ研究など)」が挙げたが、どう思うか。』

・授業見学などを小中一貫教育の取組で行っているの
で、学習意欲については高まって入学してくる。今まで
の取組で「中1ギャップ」の解消にはつながったが、学
力向上と小中一貫教育とのつながりは分からない。(2
0歳代)

・6学年は、中学校への授業見学や部活動体験などを通
して、学習意欲は向上したと思う。中学生になるには勉
強を頑張らなくてはいけないという事で児童も先を見
通して意識して勉強するし、担任もその体験を通して
「頑張っていこう！」と声をかけやすいが、学力の向上
というあまり実感はない。(50歳代)

・小中一貫教育の取組を行うことで、小学生は、中学校
で学ぶことや、行事などについて見通しを持つことが
できる。また、児童生徒交流行事で憧れの先輩に触れ、学
習意欲は高まっていると思う。また、小学校の先生は、
児童は中学校でどのような学びするのかを踏まえた指
導ができ、中学校の先生も、生徒のこれまでの学びを踏
まえた指導ができる。学習のギャップを解消するとい
う意味では、学力向上につながるのではないかと。(50歳代)

○『県内のアンケート調査結果から、小中一貫教育の課題として、「③教職員の意識(小学校文化、中学校文化の共有など)」「⑥小中一貫教育への負担感・多忙感(これまでの教育からの転換など)」「①小中合同研修の時間確保」が挙げりましたがどう思うか。』

・小中一貫教育への負担感・多忙感についてはそう思
う。特に、児童生徒交流行事などの担当になった時は、
行事の打ち合わせや全体への周知など、普段の仕事に乗
っかってくる作業になる。(30歳代)

・小中学校の連携、接続の問題を検討する際、小中学校
教員が互いの教育課程を理解し、学力観、授業観を小中
一貫したものにするという系統性を確認することが必
要であると考え。また、小中学校それぞれの独自性も
大切にすることにより小・中学校教員が小中学校の新しい
学校文化を創るとの目的をもって取り組むことが重要。
(40歳代)

・負担感や多忙感の程度は、教職員一人一人の感じ方
や、置かれている立場によって変わる。負担感や多忙感
が課題となっているのであれば、小中学校で話し合う必
要があるし教育委員会等にも指導を仰ぐ必要もある。
(40歳代)

5. 研究の目的と仮説

(1) 研究の目的

本研究は、これまでの本校の生徒、教員における小中一貫教育の現状と課題を踏まえ、学校の実態に応じた改善策を提案することを目的としている。各種アンケートの結果から、本校、本校学区の小中学校の学力向上を視野に置い

たとき、小中一貫教育を推進する上で次の①～③が課題が考えられる。

- ①教科指導などで、教職員の意識の共有や小・中学校の文化の相互理解が難しい。
- ②小中合同研修会など、小・中学校の教職員が集まる時間と場の確保が難しい。
- ③小中一貫教育への負担感・多忙感を感じる。

(2) 研究の内容

研究の主な対象としては、算数、数学の教科を中心に、小中学校9年間の子どもたちの学びと育ちの連続性を重視した教育を展開する。そのためには、小中学校教員相互の理解と協働的な活動が求められる。そのことにより小学校での学習と、中学校での学習が円滑に接続され、児童生徒の学力が向上すると考えられる。

仮説

井上(2008)は「小学校と中学校の『学校の文化』で相当の乖離がある。おそらく、教員の『授業観(教材研究の実質)』や『子ども観』『学ばせ方観』で相当の相違がある」と指摘している。合同研修会や教科部会を活用し、小学校と中学校の学習指導の一貫性を構築すれば、学習指導をより効果的なものにすることができるであろう。

(3) 研究実践

①仮説検証に向けた小中学校の授業連携(小学算数、中学数学の実践を通して)

(1) 小中の系統性について(関数の系統性)

夏季休業中の教科別協議を経て、具体的にどの単元についてどのように連携をするか、小学校の算数主任と意見交換をした。特にその中で、課題に挙がってきたものの1つに、中学校の生徒から「関数が難しい」「関数が分からない」といった声が授業で明らかになった。特に、中学校1学年では関数関係を式に表すことは苦手とする実態であることが明らかになった。

関数は「数と式」や「図形」、「資料の活用」といった他の領域以上に小学校と中学校の学習内容の系統性が強い。具体的には、関数に関わる学習は、4年生で「伴って変わる2つの数量の関係」、5年生で「簡単な比例の関係」、「2つの数量関係」、6年生で「比例と反比例」を学習する。小学校を卒業し、中学校の関数に関わる学習は、1年生で「比例と反比例」を学習し、2年生で「一次関数」、3年生で「2乗に比例する関数」について学習する。そして、その先の高等学校で「二次関数」、「指数関数」、「対数関数」、「三角関数」、「導関数」などの学習に発展する領域である。ほとんどの児童生徒が高等学校に進学する今日、このようにつながりの深い領域を学習し、理解する児童生徒にとって小中学校で関数をどのように学習するか、また、この系統性を理解した上で、どのように指導するかは重要である。

そこで、児童生徒は関数の概念を難しいと捉える原因を探るべく、まず、学習指導要領解説による小中学校の指導内容の概観について確認した。中学校の学習指導要領解説

数学編「C関数」指導内容の概観には以下のように書かれている。

小学校算数科では、比例、反比例を考察するときの変域は、負でない数であったが、中学校数学科では、これを負の数を含む有理数まで拡張する。このことに伴い、小学校算数科において表、式、グラフのそれぞれで考察していた比例、反比例の特徴を、文字を用いた式 $y=ax$ 、 $y=ax^2$ により定義し、式に基づき比例、反比例の性質を一般的に考察する。このように、中学校数学科では、関数関係の考察における文字を用いた式の有用性について理解する。なお、文字を用いて比例の関係を式で表すことについては、小学校算数科においても学習している。関数関係の表現や処理には、表、式、グラフが用いられる。表、式、グラフについては小学校算数科においてもある程度まで学習されているが、中学校数学科では、特に、表、式、グラフの関連に着目しながら、比例、反比例といった基本的な関数の特徴について理解を深める。

下線部にもあるが、小学校では比例、反比例の特徴を、表、式、グラフのそれぞれで考察していたが、中学校では式に基づき比例、反比例の性質を一般的に考察している。また、小中学校で使用されている教科書の扱い方にも違いがある事が分かった。

(2) 授業実践による小中の差異

小学校では、変数 x と y の変化について表を用いて確認し、比例を定義している。しかし、中学校では、式を用いて定義しており、比例の定義については小中で統一されていない(図1)。さらに、表の表し方についても、小学校では、 x の値が1から始まっているが、中学校の表では、 x の値は0から始まっている(図2)。これは、小学校の表であれば中学校の比例の定義である式で表すことができるが、中学校の表は、小学校の比例の定義では成り立たなくなる場合がある。佐藤(2002)は、倍比例の定義や、商一定の定義についても疑問を投げかけており、関数の定義に関する小中の違いが明らかになっている。

図1 小中学校の比例の定義

小学6年生 算数(啓林館)

ともなって変わる2つの量 x 、 y があって、 x の値が2倍、3倍、……になると y の値も2倍、3倍、……になると、 y は x に比例するといえます。

中学校1年生 数学(啓林館)

y が x の関数で、その間の関係が、 $y=ax$ a は定数で表されるとき、

y は x に比例するといえます。また、定数 a を比例定数といえます。

比例の関係 $y=ax$ を、関数 $y=ax$ ということもあります。

図2 小中学校の表の表し方

小学6年生 算数 (啓林館)

1 128ページの⑥の時間と水の深さは、どんな
変わり方をしているか、くわしく調べてみましょう。

時 間(分)	1	2	3	4	5	6
水の深さ(cm)	2	4	6	8	10	12

中学校1年生 数学 (啓林館)

前ページの線香を燃やす実験で、火をつけてからの
時間 x 分と燃えた長さ y mm の関係は、次の表の
ようになりました。

x	0	1	2	3	4	5	6	7
y	0	3	6	9	12	15	18	21

(3) 授業実践による系統性の扱い

A, 小学校の学習で起こりうる誤りについて

小学校の算数主任と意見交換の中で、児童生徒の様子から、以下のような注意点について確認した。

- 関数の学習で、比例と反比例の事例しか扱わない場合、児童は「比例でない関数は反比例である」と判断してしまうため注意が必要である。
- 小学校の比例の学習では、 x の値が増加すると y の値も増加する問題を扱うため、児童は「 x の値が増え、 y の値が増えると比例である」、または「 x の値が増え、 y の値が減ると比例ではない」と判断する可能性がある。変数の増減を根拠として比例か比例ではないかを判断してしまう可能性がある。
- 反比例では x の値が増加すると、 y の値は減少する問題を扱うため、児童は「 x の値が増加したとき y の値が減少すると反比例である」と判断する可能性がある。 x や y などの変数の増減を根拠として反比例かどうかを判断してしまう可能性がある。

中学1年生の関数の学習の中で、小学校で学習した比例、反比例の定義を覚えている生徒は多く、小学校でしっかりと学習した様子が伺えた。しかし、比例か反比例かを判断する問題などでは、「 x の値が増えたとき y の値が減ると比例ではないから反比例である」や、「 x の値が増加したとき y の値が減少すると反比例である」という生徒が見られる。

小学校では、値の変化に注目し、定義を満たしているかどうかを丁寧に確認するように促し、判断できるように指導している。このことは、中学校教員はしっかりと理解し、生徒の様子を確認しながら丁寧に指導する必要がある。また、小学校教員は、中学校で学ぶ定義などを踏まえ、比例、反比例以外の関数にも触れることも視野に入れ、先を見通した指導をすることで、中学校への接続が図られる。

B, 表について

0の扱いについては、小学校では表で x の値が0になることはない。しかし、グラフをかく場面、 $x=0$ のときの y の値を求める必要がある。このように、 $x=0$ に対応する y の値を求めることについて、表とグラフに違いがあり、戸惑う児童生徒がいることが予想される。 $x=0$ に対応する y の値を正しく読み取ることができるよう、表の指導を行い、児童生徒がスムーズに学習できるように、小中学校の教員が指導内容について連携を図っていくことが大切になる。

また、関数の学習で、表の指導を行う場合は、「 x の値が2倍、3倍になると、 y の値も2倍、3倍になる」という変化の見方(横にみる)だけではなく、 x と y の関係に着目する対応の見方(縦にみる)も必要になる(図3)。児童生徒が表を用いて変化や対応の特徴を見いだせるように指導することが必要であり、表を用いて具体的にそれぞれの変化がどのようになっているか丁寧に確認する指導が小中学校ともに大切となる。

特に中学校では、小学校で学んでいる表から特徴を読み取ることを改めて確認し、繰り返し指導する必要がある。そして、変数や比例定数を負の数に拡張した際には、表をもとに具体的な数値を用いて変化や対応を捉えるとともに、考察する範囲を拡張して比例を調べているという見方・考え方を生徒に意識させることが大切になる。そして、正の数の場合と比較する指導を行うことも大切になる。

比例定数が正負の数の比例や反比例、一次関数など、いろいろな関数を扱う際に、表を活用して変化と対応の特徴を見いだすことが有用な考察の方法であることを、児童生徒が実感できるように指導したい。

図3 表の見方

以上の事を踏まえつつ、小中学校で連携をして、関数の学習において小学校の接続授業と、中学校の接続授業を計画する。具体的には、児童生徒の様子を踏まえながら、小中学校それぞれの教科書を活用し、関数の領域の学習内容を検討した。そして、小学4年生から中学3年生までの関数の単元目標と、関数の単元における小中一貫教育の視点を明確にし学習計画を作成した。

(4)「関数」に関する小中接続授業計画

<p>【小学4年生】 単元名 : 変わり方調べ 単元の目標: 伴って変わる二つの数量について, 表を用いて調べたり式に表したりすることができるようにする。 小中一貫教育の視点: 伴って変わる二つの数量について, 表で調べることのよさを学ぶ。また, 身近にある伴って変わる二つの数量についても触れる。</p>
<p>【小学5年生】 単元名 : 比例 単元の目標: 簡単な場合の比例の関係について理解し, 伴って変わる2つの数量やそれらの関係を表を用いて考える力を養う。 小中一貫教育の視点: 表やグラフの指導だけではなく, □や○などを用いた式で簡潔に表せることよさに気付かせ多面的に捉えようとする態度を養う。</p>
<p>【小学6年生】 単元名 : 比例と反比例 単元の目標: 比例や反比例の関係について理解し, 伴って変わる2つの数量やそれらの関係に着目し, 表や式, グラフを用いて変化や対応の特徴を見いだして2つの数量の関係を考察する力を養う。 小中一貫教育の視点: 表やグラフの指導だけではなく, □や○などを用いた式で簡潔に表せることよさに気付かせ多面的に捉えようとする態度を養う。さらに中学校の学習内容にも触れ「関数」について学習する。また比例反比例以外の関数にも触れる。</p>
<p>【中学1年生】 単元名 : 変化と対応 単元の目標: 具体的な事象の中にあるともなって変わる2つの数量に着目して, 比例や反比例の関係を見だし, その変化や対応のようすを考察することを通して理解を深め, 利用できるようにする。 小中一貫教育の視点: 「関数」の定義をしっかりと押さえる。また, 小学校の比例, 反比例の学習をベースに, 表, 式, グラフの流れを踏まえつつ, 特に, 中学校では式を中心とした定義となっていることや, 式の有用性を確認する。</p>
<p>【中学2年生】 単元名 : 一次関数 単元の目標: 変化や対応についての見方や考え方をいっそう深めるとともに, 事象の中から一次関数を見だし, それを用いることができるようにする。 小中一貫教育の視点: 比例, 反比例以外の新たな関数に触れる単元であるが, 小学校から学んでいる表, 式, グラフの流れを踏まえる。</p>

<p>【中学3年生】 単元名 : 関数 $y=ax^2$ 単元の目標: 具体的な事象の中から2つの数量を取り出し, 表, 式, グラフを使ってそれらの変化や対応のようすを調べることを通して, 関数 $y=ax^2$ について理解する。また, 具体的な事象の中から, 関数関係を見だし, 表現し, 考察することができるようにする。 小中一貫教育の視点: 今まで学んだ比例, 反比例と何が違うのかを押さえながら学習する。そして, 小中で学んだ「関数」を振り返り, 生徒一人一人が「関数」を正しく理解する。</p>
--

6, 本年度の研究実践

(1)小, 中教職員の相互理解の促進

小, 中の異なる文化を背景としながらも, 小, 中教員の相互理解を促進するものとして以下の3つを考える。

①教科指導力の充実

小中一貫教育の実施に当たっては, 小・中学校教職員がそれぞれの課題解決に資するため, 互いに授業を見合うなど, 小・中学校教職員が互いの専門性に学び, 9年間の教育課程及び指導方法, 子どもの発達段階などを理解することが必要である。具体的には, 小学校教員は自らが指導する内容が中学校における学習との接続を理解しながら指導し, 中学校教員は小学校における学習の程度を把握した上で各分野の指導をすることが必要である。

本年度は, 小学校算数科と中学校数学科で接続授業を計画した。

②小中一貫教育への小中相互理解(小中教科部会)

合同研修会で「教科部会」「生活や学習についての連携」「児童生徒交流」について意見交換を行った。特に教科部会では, 各教科の児童生徒の習熟度や, 小中の授業で重点を置く単元の共有をおこなった。

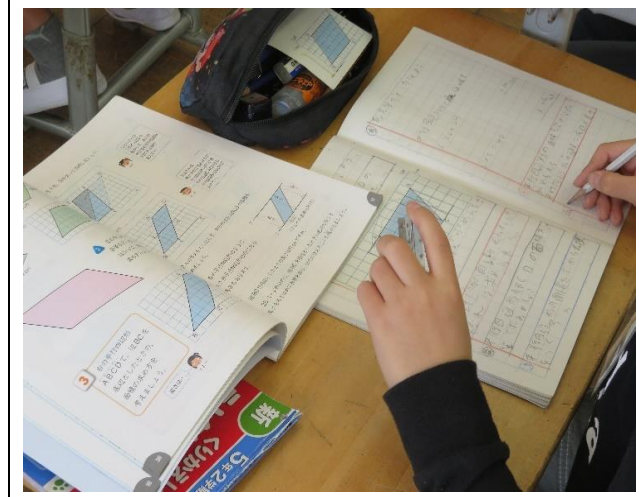
教科	話し合われた内容
国語	<ul style="list-style-type: none"> 文章を書くことに抵抗を示す児童生徒が多い。 小学校では1年生で日記を書いているが, 学校全体で取り組んでいる訳ではないので, 担当によって差がある。 中学校では全校で漢字検定を行っているのので, 小学校からそれができると良いのではないかと。学力面で, 何かしら共通に積み上げて中学校でもつなげていけるものがあれば。 国語以外にも言語活動として共通して取り組んでいきたい。
社会	<ul style="list-style-type: none"> 社会科では一斉授業を行うことが主。習熟度ではないが, グルーピングにおいて教師側の配慮が大切。上位, 中位, 下位, それぞれの子どもに学びの機会を与えられるように学び合いの1つの方法として有効。 小学校の授業で重点を置く学習内容は, 3年が「市」, 4年が「県」, 5年が「産業」, 6

	<p>年が「歴史経済」。学習内容がだんだん広がる。視野が広がっていくことを教師側が念頭に置いたうえで授業を行うことが大切。</p>
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・習熟度について、4年は数と計算が低い。6年は全体的に伸びが良い。1年は図形は良いが、数量関係が低く、小数の逆数などがつくれない。2年は資料の活用が一番よい。3年連立二元一次方程式などの解答が的外れ。 ・説明をするのはあまり差がないが、図形よりも計算処理が課題。比例が苦手な文字で処理するところが苦手。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・比の計算、小数、分数の計算で、中学の理科の苦手意識が生まれる。算数や他教科との関わり。小学校段階から、自分の言葉で考察を書かせる必要がある。 ・小中学校の活動の違いについて。小学校はガスバーナーを使わない(ガスコンロやアルコールランプ)。マッチの火がつけられない。上皿てんびんは使用しない(現在は電子てんびん)。安全めがねの使用。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・習熟度の差が大きいが、入門期の導入で、英語で学ぶ楽しさを味わわせる指導を工夫していく。聞く、話す、伝える、伝え合う活動を中心に、日常に関連した活動を行う。 ・専科と連携して外国語に関する掲示を教室に掲げ、英語が身近に感じる環境づくりをおこなう。小中連携系統表の確認(小)
音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・歌唱については小学校卒業までに発声を身につけさせたい。 ・鑑賞については、音楽が得意な教員と苦手な教員で差が大きい。 ・和楽器の指導に関しては、中学校教員が指導に当たったり、道具の貸し借りは可能。
体育	<ul style="list-style-type: none"> ・小中の授業で重点を置く単元は「体づくり運動で持久力を高める動き、体の柔らかさを高める」 ・授業実践で良かった例は、活動の難易度を徐々に上げる指導の工夫。全員がボールに触れられる場づくり。
図工	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校2校でやっている内容(題材の取り組み方)が少し違うこともある。単級の学校なら昨年度その学年を受け持った教師の話聞きながら、複数の学級がある学校なら、それぞれで確認をしながら指導する。 ・スケッチのしかた、絵の具の使い方、パレットの使い方などが課題となる。 ・美術展に展示した児童生徒の作品をそれぞれで交換して展示したが、良い刺激になった。
技術家庭科	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校から使う工具の使用法と図工との関連を図る。 ・実生活において、学んだことをどう生かしていくか。作品の完成度ではなく、消費者として、賢く自分に合った選択の工夫が大事。



③小中学校教職員のチームワーク意識

小中学校の教職員が「義務教育9年間で子どもを育てる」という意識を持ち、それぞれが果たすべき役割とチームワークを最大限に発揮し、児童生徒の個に応じた質の高い・きめ細かい学習指導、生徒指導を行うために小中学校教職員のコミュニケーション力が必要となる。



(2)既存の取組の充実

①研修会の充実

教科部会研修会や生徒指導、教育相談部会などの研修会は、月に1度の放課後研修会や、ランチタイム研修会を行うなど、弾力的な研修計画を作成する。

ア 違いを知り、連携を深める。(生徒指導・教育相談)

小学校の教員は中学校の教員に対して一人ひとりへきめ細かな指導を期待している。学級担任制と教科担任制など、小・中では仕組みが異なることを踏まえつつ、互いの指導を有効に活用する意識へと変えていく。

イ 一貫した教科指導(教科部会)

小学校と中学校の授業スタイルの実態を明らかにし、学習指導をより効果的なものに充実させる。特に中学校教職員が専門性を発揮する。また、乗り入れ授業などを積極的に行えるように調整する。

ウ 精選し、交流を深める。(児童生徒交流行事)

授業見学や部活動体験、芸術祭への参加など、多くの交流行事を精選し、効果的な活動を進める。特に、ねらいや振り返りなどを明確にする。

②年度末のアンケートの実施・活用

小中一貫教育の取組についてのアンケートを中学校区内の小中学校全職員に実施する。成果と課題を明確にし、次年度につながるようにする。

部会	成果, 課題, 改善点, 意見等
授業研究部	<ul style="list-style-type: none"> ・全国, 県の問題分析を小中で交換して小中の繋がりを意識して行っても良いと思う。 ・表現して活用する能力。知識・理解はあるが活用できていない。 ・記述式の問題に対して, 答えだけではなく, どうしてその答えになったかまで意識して授業をしていく必要がある。
交流部	<ul style="list-style-type: none"> ・出前授業(中→小)は児童にとってとても刺激的で, 中学校の授業をイメージしやすかった。特に外国語の授業は好評。 ・夏休みの中学生のアシスタントティーチャーも好評。 ・運動会で陸上部生徒の手伝いは助かる。 ・年度末の生徒会訪問は, 卒業前の3年生が行うほうが訪問しやすいのではないか。
連携部	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校で課題となった「挨拶」「チャイム席」「姿勢」「整理整頓」は小学校で指導して中学校につなげる。 ・小中学校でそれぞれの授業を見に行く。

(3) 子どもたちの小中連携



夏季休業中に, 小学校の児童に中学校の生徒が問題を教

える(アシスタントティーチャー)活動を行った。参加した生徒に対してアンケートを実施し, 以下に載せる。

○補習に参加して良かったか。

はい76名 いいえ2名

○補習に参加して, 学習内容が分かるようになったか。

分かるようになった50名 以前と変わらない28名
分からなくなった 0名

○補習に参加する前と, 参加後では, 学習する気持ちの変化はありましたか。

- ・学習内容が分かるようになった50名の内
変化あり40名 変化なし10名
- ・学習内容の理解は以前と変わらない28名の内
変化あり12名 変化なし16名

○具体的にどのような変化があったか。

- ・家でも学習する気になった 26名
- ・学習に対して前向きになった 24名
- ・自信がついた 18名
- ・もっと問題を解きたいと思うようになった 12名
- ・学習って楽しいと思うようになった 6名
- ・友達に教えたいと思うようになった 2名

7, 研究のまとめ

(1) まとめ

- ・小中学校教員の教育への想い(指導観, 学習観, 子どもの発達観など)を相互理解することで, 小中一貫教育の意識を高めることができる。
- ・各教科における系統性の相互理解を深めることで, 小中一貫を意識した授業改善ができる。
- ・小学校児童と中学校生徒の相互交流の促進により, 子ども達にも小中一貫の意識を持たせることができる。

(2) 今後の課題

- ・小中学校教員の交流の場と時間をどう確保していくか。
- ・小学校と中学校の生徒指導, 生活指導, キャリア教育などの一貫性をどう意識し, 小中で共通理解を図るか。

8, 参考資料

- ・井上正允(2008)「小学校算数と中学校数学の接続に関する研究(1) - 中1ギャップと算数・数学の授業を考える」『数学教育論文発表会論文集』
- ・河原国男他(2014)『小中一貫・連携教育の実践的研究—これからの義務教育の創造を求めて—』
- ・国立教育政策研究所(2016)『小中一貫 [事例編]』
- ・文部科学省「初等中等教育の学校体系に関する研究報告書2」小中一貫教育の成果と課題に関する調査研究
- ・佐藤俊太郎(2002)「ニューサポート中学数学 No. 14」p. 3
- ・文部科学省(2018)「中学校学習指導要領解説数学編」

【謝辞】この研究に当たって, 所属中学校区の小中学校の校長先生をはじめ, 教職員の方々, 深谷市教育委員会, アンケートにご協力いただいた県内各市町学校関係者の皆様, 及び, 県内各関係教育機関には深く感謝申し上げます。